

10. 学生の課外活動

1) ボランティア活動への支援

高知県立大学看護学部では、教員と学生が積極的に地域社会のボランティア活動に参加している。教員2名がボランティア委員として、学生のボランティア活動を支援・促進することで、学生の人間や社会への関心を高め、さらに主体性を育むようにしている。ボランティア委員はまた、ボランティアを募集する機関・団体と学内教員との橋渡しを行っている。

今年度は、高知医療センターでのボランティア活動が再開となった。ボランティア委員は高知医療センターとの活動調整として、活動再開に合わせて事前学習環境を整え、学内演習を実施した。連絡協議会の参加と並行し各機関との調整を重ね、11月から学生の活動が開始となった。例年の高知県小児糖尿病サマーキャンプでのボランティアの募集や、ボランティアを行う際の保険への加入の支援も行った。以下、今年度のボランティア活動への支援について報告する。

(1) ボランティア活動参加前の学生への支援

① 学内ボランティアオリエンテーション

- ・看護学部が行っているボランティア活動について、書面と Moodle を用いて紹介した。ボランティア活動の紹介には、過去の活動の様子なども含め、活動内容が容易にイメージできるように作成した。

② Moodle を用いた事前学習と学内演習

- ・学内演習の事前学習として、ボランティアガイダンス資料、車いすの移乗・移送に関する資料と動画、視覚障がいをもつ人の歩行介助に関する資料などを Moodle 掲載した。
- ・学生は学内で車いすの実技演習や視覚障がいをもつ人へのガイドの実際について、ガイドする側およびガイドを受ける側の状況を体験型の演習を通して学んだ。演習後は、学生にチェックリストを用いて振り返り、学びや感想を Moodle 入力してもらった。

③ 高知医療センターでのガイダンス（10月）

- ・高知医療センターの概要やボランティア活動紹介などの講義と院内見学に参加してもらい、ボランティア活動先について理解を深め、活動に向けて準備を整えた。

(2) 高知医療センターでのボランティア活動

① 活動の実際

- ・高知医療センターの病院ボランティア「ハーモニーこうち」への参加は、花壇の整備や受付玄関前の清掃などの活動であった。機関の担当者と連絡をとりながら、学生が主体的にボランティア活動に参加できるように支援した。

② 活動期間と募集方法・参加状況

- ・活動期間は11月～1月であった。募集方法は、Moodle から活動内容と時間をアナウンスし募集を募った。その結果、11月5名、12月5名、1月3名の計13名の参加であった。

(3) ボランティア活動支援の評価と今後の課題

- ・Moodle を活用することにより、学習者は自分の時間の中で学習できる環境を整えることができた。①のオリエンテーションでその場で Moodle 登録を呼びかけ全員の登録ができたため、それ以降、タイムリーに情報発信を行えた。学内演習は、事前学習で得た知識を実際に体験することで、教員は学生の状況を理解でき、学生が態度や技術について学びを深めることができた。
- ・教員が各機関と連絡をとり、情報を共有することで学生の活動参加に向けて、必要な準備を整えることができた。今年度は科目等の履修のため学生のボランティア活動が限定的であった。しかし、高知医療センターにおける今年度のボランティア活動が段階を踏んでいる状況をみると、各

機関にご負担をかけることがない範囲で学生の現地での活動をご支援いただきました。次年度は学生の積極的な参加をよびかけ、主体的な活動の支援を行っていく。

2) 地域における活動

(1) 室戸ボランティアリーダー

2021年より大学のサークル団体として登録された室戸ボランティアリーダーは、県内の「国立室戸青少年自然の家」や「高知県立青少年センター」にて教育事業に参加する子どもたちのキャンプや自然体験のサポートを行っている。今年度も、リーダートレーニングの企画運営、レクリエーションや実際に行われる体験プログラムを学び、「子どもたちのためにどうすれば良いか」を考え、学生同士で相談し合いながらサークル活動に取り組んでいた。学生同士の交流会、リーダー養成講座の企画や開催を例年通り年間5回実施した。また、小学4～5年生の参加者を対象としたボランティア活動は年間17回開催することができた。小学生を対象とした自主企画を冬に1泊2日で計画した。自主企画ではオリジナルで考えた「遊び」を工夫し提供するなど、子どもたちが安心・安全に活動できるような地域での取り組みへの貢献をおこなった。

今後も、看護学部では、課外活動において報告や相談を受けながら、支援を継続していく。

3) 高知県立大学災害看護学生チーム(SIT)

高知県立大学災害看護学生チーム（以下、SIT）では、令和6年1月に日本DMAS（日本災害医学会学生部会）のメンバーとして能登半島地震のあった石川県庁に入って活動した1名（3回生）をリーダーに、学内での活動を継続した。前期は代表の3回生が引き続き定例の勉強会（災害医療の基礎知識、など）の運営を行ったが、2回生の中で代表をとる学生がいなかったこともあり、後期は1回生の中で熱心に活動推進に取り組むメンバーによって、活動が引き継がれた。大学祭では2年ぶりに、災害医療に関する展示ブースを設け、簡単なトリアージ講習や、段ボールで災害現場を再現したコーナーではトリアージ体験なども主催した。学外から訪れた高校生や子供たち、また医学生や医療関係者と思われる人たちとも熱心に意見交換を行なう経験ができたことで、1回生にとっても、社会とのかかわりを通じた、災害医療の啓発について、意識が高まったようである。

学内での活動を含めて、今後の活動については模索が続いているが、まずは母体ともいえる日本DMASの活動に積極的に参加するメンバーを増やすこと、日本DMASでの活動を通して、ひろく仲間や情報をひろげることには力を入れている。



【大学祭の展示】

鳥味行きのバスが事故で
大変なことに！

中にいる傷病者をトリアージ！

4) イケあい地域災害学生ボランティアセンター

イケあい地域災害学生ボランティアセンター（以下、イケあい）では、外部顧問の山崎水紀夫氏が1月の能登半島地震の被災地である輪島市に災害ボランティアセンター立上げ支援に入っていた。石川県は、看護学部にも出身学生は数名おり、なんとか現地のボランティア活動に参加できないものかを模索した。その結果、5月の連休中にまず3回生3人が先遣隊として輪島市の災害ボランティアセンターに行き、活動の傍ら、輪島市の避難所・仮設住宅の支援を任されているJOCA（公益社団法人 青年海外協力協会）の現地リーダーとつながることができた。

その後、本格的な仮設住宅への移行が進み始めた時期をみはからって、9月10日（火）～14日（土）、17日（火）～20日（土）の2回に分けて、学生5名（計10名）と教員1名によるボランティアグループを結成し、支援活動を行った。活動に当たっては大学後援会やしらさぎ会、看護学部同窓会からの支援をいただくことができたため、安全な場所での宿泊確保や、レンタカーの機動力を生かした小規模避難所でのお茶会活動などを行うことができた。参加したのは、前半は看護学部と社会福祉学部の1回生中心の5名、後半は看護学部の1～3回生5名であった。活動は主に、仮設住宅にある集会所を借りて、午前中は体操やボッチャで身体を動かし、午後からはお茶会形式のハンドマッサージや蒸しパンづくりなどを行って、集まって下さった方々同士の交流を深めた。

彼らは何をするにも初めてであったが、回を重ねるごとに積極的となり、「誰かのために」「その方々のために」何かをすることの手ごたえを学んでいたように感じる。その後、高知に帰った後も、地域行事で募金活動を行ったり、高知からでもできる支援活動を行っていた。高知－輪島間は、JRを乗り継いで往復できるギリギリの距離であり、後援会からの交通費の支援や、活動の準備には現地のJOCAからも多くのご協力をいただくことで実現できたと考えるが、こうした実際の活動経験は、学生にとっても今後の大きな糧となることを信じたい。

この他、イケあいは2回生の代表と幹部を中心に、三里フェアの運営支援を行い、また高知市の助成金事業である、「地域で行われる防災活動に対する学生参加の補助金」なども活用し、いくつかの地域活動に参加している。大学祭では、初めて模擬店を出店し、販売したベビーカステラは、大好評であった。

コロナ禍を挟んで、ほぼ全員が先輩たちの行なう地域活動を知らない世代になってしまったが、また少しずつ、自分達の活動を確立して欲しいと考えている。



輪島市でボッチャは人気のコミュニティスポーツでした